

「かいめい」乗船による研究現場体験を通じた 若年層・保護者向け海洋科学リテラシー醸成

－ 岩手県「三陸防災復興プロジェクト2019」とのコラボレーション －

○監物うい子・藤倉克則・田村貴正・吉澤理・中條秀彦・野村陽・荻田善之・外崎瞳・豊福高志
(海洋研究開発機構), 藤沼忠邦・小野寺亮太(岩手県), 杉村誠・鈴木良博(新江ノ島水族館),
谷健一郎(国立科学博物館), 他 KM19-06 航海乗船研究者

海洋研究開発機構では、未来を担う子供たちの海洋及び海洋科学技術に対する興味喚起を目的として、ハガキの大きさの紙に海洋への夢やアイデアを描く、全国児童「ハガキにかこう海洋の夢コンテスト」(令和元年より「JAMSTEC 海洋の夢コンテスト」に改名)を実施している。第21回となる平成30年度は16,865点の応募があり、この中から入賞した10名の入賞者と保護者を対象として、海底広域研究船「かいめい」による体験乗船を実施し、海洋科学リテラシーの醸成を試みた。

本航海は岩手県宮古港を寄港地とし、前週に実施した宮古港での深海調査研究船「かいらい」の船舶一般公開と併せて、岩手県の主催する「三陸防災復興プロジェクト2019」と連携して実施した。コンテスト上位入賞者に加え、岩手県の児童、生徒を招待し、参加者同士の交流を通じて、子どもたちに東日本大震災に対して関心を持ち考えてもらうことを狙った。また、地元の新聞社やテレビ局の乗船取材を受けニュース化されることで、地元の方に現在の岩手沖の海の状況や東北地方太平洋沖地震に関する機構の取り組みについて理解を深めていただく機会とした。

体験乗船は、参加者を4班に分け、令和元年8月9日～12日に日帰りでの航海として実施した。無人探査機「KM-ROV」を潜航させて、水圧で物が変わる様子を観察したり、海底の生物等の観察及び採取を行った。また、航海中には、船内見学や「KM-ROV」操縦体験を行い海洋調査活動について理解を深めるとともに、採取した生物や泥、ごみの船上での観察により海洋調査研究の体験をしてもらった。三陸沖は豊かな漁場として知られるが、水産資源として重要な魚種であるキチジ等に注目させる一方で、海底を覆いつくすほどのクモヒトデを観察し、三陸の海の豊かさや生物同士のつながりを学ぶ内容とした。また、新江ノ島水族館等と連携し、航海後にも採取した生物や映像の一般への公開、さらには本航海を題材にしたトークイベントの開催を実施することで、体験乗船参加者のみならず、より広く、当機構の取り組みや深海について理解増進を図ることができた。

さらに、技術的な試行として、「KM-ROV」に取り付けた全方位カメラからROVのケーブルを経由してリアルタイムで映像を伝送し、船上にてリアルタイムでVR映像を視聴することに成功した。

参加者に対して実施したアンケートからは、航海中の体験がそれぞれに印象深いものであったことが読み取れ、本航海が海洋への興味喚起、理解増進につながったものと考えられる。



「KM-ROV」操縦体験



採取した深海生物の観察



体験乗船を終えて記念写真